清浄光
歡喜光の巻

御遺文

清浄光

感覺とは　普通は視覺聽覺嗅覺味覺觸覺の感覺作用にして　精神が外界との關係には最も先驅にして　すべての心の作用は　感覺の關係より發るべきものなり。然るに天然教には　全く天然的の感覺界に客體を投映し神は物質界の中に有りとして　或は太陽を神とし　または天然一體の如きは宇宙の無限なるを神の國とするが故に　感覺界に神は實在すと　質朴なる宗教意識なり。

儒教には上天の載は聲も無し臭もなし至れる哉とは感覺の極にして超感覺に進まんと欲する兆あるも未だ超越する能はず。超然主義には此感覺世界を超越して　命終りて彼岸に到達して　又微妙にして清淨莊嚴の感覺世界　即ち七寶莊嚴の淨土　また美天國彼岸に在りとす。

圓具には客體の關係に主體の心機に感覺性に感ずべきものは　天然の感覺　主體の

感性卽ち心機は宗教的精神開展の上に　超天然の感性となり來りし後客體の關係の心機の現象界なり。淸淨なる感覺世界の說は　已に形而上の無碍光の中に於て已に論じぬ。今は正しく人の宗教關係の圓滿に開展したる心理現象にして　知力の佛知感覺の顯現は　初め佛知見啓示として先づ感じ來るは感覺態なり。或は光明相現じ來るあり或は瑠璃寶地等の妙色莊嚴顯現す。其には智慧光の下に於て說明せん。

啓示としては　精神に感發し益々進化して　能く精練せる機能は純熟して　感覺機能が極めて精妙に瑩然として　喩へばよく璞を琢磨して垢質去るときは內外に映徹するが如く　宗教機能の最精妙に修練せるときは　洞然として十方に交徹し　靈明にして不可思議　斯如きの心機は內外に映徹して光り表裏に究暢せるが如し。此機能に超感覺の妙境顯現す。啓示によりて顯現したるも　已に久しくして精練する時は　感性の精妙に熟するものゝ如し。故に能く精練し成熟したる機能は　必ず感性に證明すべし。感覺機能精明にして天然の人に超えたり。

法華法師功德品に　六根淸淨の功能を明かせり。卽ち肉眼淸淨にして障外を見せしむ。眼に八百の功德あり。又千二百の勝利を得以て遠音を聽かしむ。鼻根淸淨にして云々。

父母所生淸淨肉眼世界內外を映徹して見る。又因緣果報の生處を悉く見る。又淸淨の耳根をもて　世界內外の種々の音聲を聽くに　皆悉く種々の音聲を分別して聰慧にして能く聞知すと。

次に八百の鼻の功德をもて　是の淸淨の鼻根もて世界內外の種々の諸香を嗅ぐ。父母所生の肉眼に五眼の用を具す　世界の內外無碍に見るは天眼の用なり。衆生の因緣を見るは法眼の用なり。其眼甚だ淸淨なるは慧眼の用なり。一時に內外感覺と觀念世界とを見るは佛眼なり。

耳根淸淨　世界內外を聞く感覺界の音を聽くは肉耳なり。觀念界の偏空を聽くは二乘の慧耳なり。觀念感覺兩方面を聽くは法耳なり。絕對圓滿を聽くは佛耳なり。また

聽きて著せざるは卽ち慧耳なり。謬らざるは卽ち法耳なり。一時に聽くは佛耳なり。

眼根亦然り　感覺人界を見るは肉眼二乘を見るは是慧眼。菩薩を見るは是法眼。佛を見るは是佛眼。父母所生は肉鼻。世界內外を嗅ぐは天鼻。不染不著なるは卽ち慧鼻。分別するに謬らざるは卽ち法鼻なり。一時に互に用ゆるは卽ち佛鼻なり。舌根淸淨にして一切の美若くは不美諸の苦澁の物も　其舌根に在らば皆變じて上味と成りて天甘露の如くならん。又舌根淸淨にして深妙の音聲を出して聞くものをして歡喜せしめん

父母所生は是肉舌。諸の語を作すは天舌。壞せざるは慧舌。謬らざるは法舌なり。一時に互用に佛舌。苦澁惡味も舌に觸れば悉く變じて上味と成るが如く　衆生眼に觸れば　妙色と變ず。一切の色は佛色と同じく　一切の聲は佛聲と等しく皆淸淨なり。身根淸淨にして　淨瑠璃の如く　衆生見んことを樂ふ世界內外悉く中に於て現前す。世界の所有の中に於て現ずるは肉身の用なり。二乘身中に現ずるは慧身の用なり菩薩中に於て現ずるは法身の用なり。佛身の中に現ずるは佛身の用なり。一時に圓現し一時に互用す。一時に謬ることなく一時に著するなく　心の實相を證する　四大皆空にして　淨瑠璃のの如くに障碍なく　森羅萬象現前せずと云ふことなし。意根淸淨にして　一偈一句を聞くも無量の義に通達し　其所說の法其義趣に隨つて　皆實相と相應す。皆俗間經書世語言不生の業等を說かんに　皆正法に順ず。是人思惟籌量言說皆是佛法にして眞實ならざるはなし。

世間の資生產業皆正法に順ずるは意淨なり。實相と違背せざるは卽ち慧意淨なり。思惟籌量皆佛法なるは佛意淸淨なり。一時に圓明に一時に互用　一時に染なく一時に謬りなし。

人の天然的の感覺性は喩へば金の鐵中に在るが如し。また眞寶珠の鐵垢の中に在るが如く　精練純熟する時は　淨摩尼輪の寶瓶に容るに交徹映飾にして　十方面に照耀せるが如く　心洞然として徹照すること無量なり。或は空間として淨瑠璃輪の如くにして玲瓏とし燦然として榮色極りなきに至らん。

感性清澄の故に　眼識清淨の故に　眼界清淨なり。耳根清朗にして耳界清淨なり或は微妙の樂音を聽き　また音聲清朗にして常の人に超えたり　身根清淨の故に身常に輕安にして體肝かなり。

此の如きの感覺的清淨微妙の境界は天然の人の窺ひ識る處に非ず。

宗教客體との關係に　感覺の妙色莊嚴界　是客體の妙色莊嚴なる哉將た主體の心機感性の精練によりてしかりやとの問題には　斯の如くに答ふるをえん。已に形而上論に論じたるが如く　超天然教として進化し發達したる宗教意識には　元より客體との關係は天然の感覺世界に求めざるは論をまたず　精神的宗教の客體は　絶對精神態として　此本質內容に豐穰に具德の故に　本質至精純粹なるにも　拘らず　衆生の心機極めて精練の內に感性清淨にして　客體との關係に　微妙なる妙色莊嚴卽ち感覺世界顯現するは起信論に說くが如く　客體の本體は　眞如無相第一義空諦にして　施作を離れたるも衆生の見聞によつて　妙用を呈して種々の妙象莊嚴界を現す。衆生の機能を離れては如來は唯々如々如々　理智獨存のみなれば　感覺莊嚴の現ずべきなし。然れども衆生卽ち個人の感性に對して　無盡の莊嚴を顯現すること窮盡なしと。

個人の心機益々進化發達するに隨つて　所感の妙象益々廣大に進化すと。卽ち識る衆生の機能に感見することを。

唯識論に一水四見の喩あり。萬法唯識の故に卽ち世界の本體は　唯精神の一元理の變作の萬物なれば　所變の顯動界は同本質の之を感ずる處の衆生の心機に種々の實相を呈ず。本質には元來實相有るなく　個々の機能に隨つて種々の現象を作すと。譬は水は同一質なるも人の感覺には江河の水と認むも　魚に對しては空氣態に比すべく若し精明に純熟しをる神識の梵天の眼には　瑠璃寶地の映徹せるに感ずべく　また餓鬼の業識には　熱火の接近すべからざる火河を感ず　との喩の如く　全く一切は唯識の所現にして　若し心識を離るれば一切境界の相なしと。若し人にして機制心理を超越して精練せる感性には客體の關係に七寶莊嚴の感覺世界顯現すべし。非物質的精神

態の客體には自己の精神の進化によらずして　物質的感覺莊嚴を求めんとせば決して得べきものに非ず。

また譬へば青眼鏡を以て外境を視る時は　萬物青色ならざるなし。若し客體の關係によりて精神轉化するときは　十方法界悉く清淨國ならざるなきを感ずべし。いかに進化したる宗教意識にも　超感覺の土に勝妙なる感覺世界を建設するは理の免れざる所　人の心理には感覺作用あり故に超天然の心理にも勝妙の感覺作用あり。こは佛智見開示の感覺啓示によりて初めて機能開展し　益々抗進し發達したる感性には　常に感念世界に之を觀見するものなり。故に斯の如きの人は經驗世界觀念世界の兩方面の感覺世界を認識することを得べし。

法華に我三界の如くに三界を見ず。實に衆生は劫盡きて燒盡さるゝも我此土は安穩にして天人常に充滿せり等云々。

然るに法華の如く　實に三界の相を知見すと云ふ文には　多種の方面を含むが如し牟尼の超感覺なる觀念世界の內容には　或は常寂光土として如々の理如々の智獨存するを見るは　是理性の智を以て內容を觀たるなり。或は華藏世界としては重々無盡の妙境を顯現す。

淨土教の如きは客體の感覺的方面を正面として　感覺的淨土の莊嚴を正面とするも經驗的天然界の感覺に求むる如きは誤謬の甚しきものと云はざるべからず。淨教天然教に非ず最も進化した精理教なり。故に淨土の本質は非物質精神態に發見すべし。

經に如來は是法界身なり一切衆生心相中に入る。忠師釋して　法界とは是意識が所緣の境なり。前五識の所緣は色聲香味觸にして　この感覺界なり。第六の意識が所緣を法界と云ふ。前五界は物的界なり。第六のみ精神界なり。五識所緣なる認識の感覺世界に如來を發見すべき理なし。全く如來を觀ぜんと欲せば如來及淨土の本質に適したる精神界に求めて觀念的に發見することを得べしとの義なり。曾て形而上論に論じたる如く觀經及三經共に物的淨土の文を見ず況んや天然界に淨土の識明すべきやある

歡喜光 解脫融合

感情的の信仰

感情的の信仰　感情は人の心理作用の中　最も觀念の度の强きものにて　人の心理の密心にあつて　內容に感ずる度の深きもの　苦樂憂喜は皆感情に屬す。人心活動の中　最も內容深密なる機能より　感情必しも野にあらず　孔子は之を知る者は好む者に如かず　之を好む者は　之を樂む者に如かず。是知力に知り　意向に好む　感情に至つて樂しむ。

宗教的獨特の精體は感情に求むると云ふが如く　客體に對する愛慕渴仰の信念ゝ高尙なる理相も新鮮なる活氣には　道德行爲の蒸氣力を發し　甚深なる悲壯には自己を脫却の勇を奮ひ　一切衆生の爲には身を苦毒の中に止むとも　忍んで終に悔じと。

脫世專念の勇氣には萬乘を　舊履の如くに脫する如きは　是心理感情に屬すべきものなり。心情宗教の發足點は　佛教に敎ふる所　苦毒の感情をもて先とす。四聖諦の中先苦諦を認め　次に苦の原因たる煩惱を退治す。

苦毒の感情は解脫宗教の發足點たりとは　人は自ら苦毒たることを認めざれば　之を解脫せんの要を感ずるなし。

人の身體の病にも苦痛を感じて　療治の要を感ずる如く　精神的宗教に於ても又然り。若し感情は何より感ずとならば　天然の人は自ら顚倒して　自己の身心土は解却せざるべからざる理性あるを識らず　顚倒して自ら苦を感ず。卽ち四顚倒を根本とす身は本空なるを實有と謂ひ　享受するものは　唯快樂幸福のみを望み　心は無常なるに常住と謂ひ　法の無我なるを自ら自在なりと謂ひ、自ら顚倒して　主我唯幸福のみを追求め　名利權威求むるに隨て至り榮耀快樂は陽炎の渴望に空しく苦しむ　哀むべし　衆生快樂主義幸福主義は常に滿足の感情あるなし。

榮華の夢久しからず　幻の快樂唯愚夫を惑はすのみ。此の身は苦の本　加ふるにまた身心の苦を受く　之を苦と名づく。天然の人は顚倒によつて　幸福主義却て苦毒の

感情甚だ多し。

身心土悉く苦毒の感あらざるはなし。身心に受る處憂悲苦惱のみ。次に超然主義實に此三界　卽ち世界苦毒充滿の處實に厭ふべし　世界は苦毒なり　罪惡なり　怨ぞくなり　蛇蝎なり惡魔なりと　此世界を棄厭すること甚し。

身は空なり　苦なり　身心土とも苦毒なり　空なり　無常なり　無我なり。此心身土を厭ひて　超然たる無漏の境に超入するに非ざるよりは　此苦を脫する能はず。

斯の如きの身心土は根底より　脫却するに非ざれは苦を脫する能はず。無爲泥洹は身心共に滅して初めて寂滅爲樂とは　是小乘が執する　苦毒と解脫とは　同じく超然主義の進みたるに　苦とは天然の衆生は迷に仍て苦を感ず　苦の體を深く觀じ來れば空なり　幻華の如し。夢の中に苦と感ず　覺來れば苦を感ずべきなし。元來死の苦なし何の處にか涅槃の樂を求めん。生死涅槃は只昨夢の如しと認むるは　空宗の執する處。進んで生死の體元涅槃常住絕對眞心の體なり。この世界及び身體と個人精神とはこの絕對理性の根底に立てり。この身心土には共に　脫却を要すべき素質を有せり。然るに天然の人は脫却の要を識らず　故に自ら主我を執し　幸福主義に托すべからざる世界に托し　自ら顚倒して苦毒を感ず。

衆生は佛性卽ち阿彌理性を具すると共に主我を執し　快樂卽ち幸福主義實有なりとの迷あつて　苦毒の垢質有する所以は　これを脫却の爲の勇氣を鼓舞し、この苦毒に耐忍すべき戰爭に勝利を得せしめん爲の方便と觀ずる時は　苦の感ずべきなし　何ぞ必ずしも世界を棄て　無爲界に超入するを用ゐん。

天然の人の主我執と幸福主義と三界卽世界依屬の天然的精神の顚倒を覺來て觀ずれば　生死卽ち涅槃　この生死の苦毒を感ずる感情を離れて　別に生死脫落の阿彌の中なる　眞我の心性あらん。

苦毒の感情なければ　脫苦專念の勇猛を生ずるなし　また一切を度せん爲には　忍終不悔の悲壯の甚深なる感動を生ずるなし。

一切享受する處に常に情を充しめば　世界の依屬を脱却して　大我の中に超入すべき動機ならん。苦の中の耐忍によりて剛毅　きたい憂怖によりて　無生忍の必要を感じ　天然の身心土を脱して　阿彌の中なる自己たることを感せば　苦毒卽ち眞正の靈福たるを感ぜん。世に苦毒の感情なかりせば　健士卽ち菩薩の理想的活動すべき材料なからん。苦あつて始めて菩薩の利他大慈悲の價値顯はる。一切衆生の苦毒は之大悲の菩薩の養成する處の資本　阿彌の恩寵を莊嚴する處の金筐といはざるべからず。

煩　惱　罪過感情

衆生に苦毒の感情の因とせる罪過は　衝動たる煩惱なる惡賊ありて道德を害す。菩提心發現すれば　自己の苦毒は忍ぶべくも　道德に阻害する煩惱こそ力を竭して　之を脱却せざるべからず。

貪戾　慳悋　瞋恚愚痴　慢嫉と恨戾　覆陰　惱苦等は內にあつて　緣に歷れ境に對して動もすれば發動して自ら害し且つ他を害し　外に六賊ありて　內面の德義を害せんとす。此如の煩惱と罪惡とは　また宗敎道德的情操發せざる程は　未だ苦悶とするに足らざるも　已に菩提心發しぬれば　內に菩提心の光ありて　之を反照するときは忍び難く　いかゞせば斯の如き罪惡を降伏すべきやと。

罪過感情に於ても　天然の人は罪過は苦毒の如きに感ずるものに非ず。菩提心發さゞる程は罪過を照す　光薄ければさほどに感ずるものに非ず。

超然主義此煩惱に對する小乘の聲聞らは　主觀的の者と感じ　人は三界生死の苦は見思の煩惱により　煩惱の因を斷ぜざるよりは　煩惱の水源を杜くなし。意志を斷ずるに非ざるよりは　煩惱を斷ずる能はず　自己の苦を脱せんが爲に　自ら罪惡の源を杜く　而して煩惱は實に煩惱なり　實に斷滅すべしと。

次に大乘空宗には煩惱　卽ち罪惡も苦と同じく　煩惱本より虛妄にして　昨夢の如し　夢の中に人を殺す　加害者も被害者も共に夢なり　何の處に罪あらんとは　超然

主義の罪過に對する解なり。

今は衆生煩惱の本體を能く　推窮むる時は卽ち是菩提の性なり。天然の人は自ら惑ふて　菩提を以て煩惱と爲す　阿彌に對し　罪過甚だ深重なりと云はざるを得ず。一々の煩惱を轉ずれば　卽ち菩提なり。吾人は阿彌の理性を具有しつゝ　自ら愚に煩惱の奴隷とならば　理性を統一せる阿彌に對して犯罪者たり。天然人の如き他律的の世間の律法の制裁に對する罪尙輕し。自己の理性を統攝せる　阿彌に對する罪甚だ重し自己內面の阿彌の聖意を瀆す罪深し。阿彌の理性たる菩提を自ら惑ふて煩惱と爲す。天然の人は感覺欲卽ち色欲の如き　聖賢を愛し　道德を愛するの誤用なり。我慾轉ずる時は度衆生利物の欲望と成らん。何ぞ非理に憤怒の勢力を己が不正を斷伏するに用ゐざる。何ぞ懈怠を罪惡に用ひざる。卽煩惱菩提　汝は貪瞋の心性を斷除して菩提を欲望し　正義を衛るの意志あらん。貪て飽くことなかれ上求菩提下化衆生。奮激して怒せよ　自己の斷惑の爲に。卽ち知る。煩惱卽菩提なりと。

苦毒と煩惱との關係

苦諦は果にして煩惱業卽罪惡は苦因なりとは　是迷界因果律なりと。必しも因果と云は　時間的に貪欲の貪の苦果　殺盜に短命貧窮の苦報の如きの關係は　證明せざるも　貪欲主我には精神的貪苦起り遮られ瞋恚家は自己の胸中の獄火に惱害せられ　殺生偸盜邪淫も　良心の苦悶は決して免れ能はず。貪瞋痴慢等の如き惱は是苦惱の元因たることは否定すべからず。

歸する處　一切の苦苦壞苦行苦等も　皆之を苦と感ずるは元煩惱による。惑は顚倒より　主我と幸福主義たり　幸福主義は決して　滿足の感情と安立すること能はざるものなり。人は苦毒を厭ひて　之を離れんと欲するも　生の苦惱は苦の元因たる煩惱を脱却するに非ざれば　決して離るゝこと能はざるべし。病を癒すに非ざれば　苦熱は除き難く　人には煩惱の病よりすべての苦惱の熱を發す。煩惱の源動たる主我は

肉により　我内衝動より　一切の煩惱を發し　この主我と幸福との惑あらん。六塵境に對し緣にふれ　思はずも罪に墮る。

自ら苦悶す

いかゞせん　天然の人　自ら苦悶を去り　罪過を脱せんと欲するも　自己の力の及ぶ所に非ず。惑業の薪あらん限りは煩惱の熱火消滅し難がたし。導師云く萬德修行實難續　一時煩惱百千交若待娑婆證法忍　六道恒沙劫未期　貪瞋卽是輪回業煩惱實是菩提因　此貪瞋火燒苦を驗するに　去つて彌陀國に入らんには如かず。

一食の時尙餘あり　如何萬劫貪瞋せざらん　貪瞋は人天の路を障ふ　三惡四趣內に身を安く。

若し娑婆の證法忍は　娑婆には卽世界依屬の主我　主我にてはとても罪過と煩惱とは離るゝこと能はざるべし。主我と幸福主義如何して　苦毒と煩惱とは脱すべきに非ざれば　この自己精神の立脚地　卽ち主我を轉ずるに非ざるよりは　離脱の道なかるべし。人には之を脱離すべき　理性の精神と　絕對精神との性能あることを知り　この眞理に依るにあらざるより　決して自己の力の能はざる處。

阿彌に依て解脱

身心土に於て脱却轉依すべき理性あることを知らず　理法には主我心快樂主我身は實有天然顚倒なり　主我は轉依すべき理性あるを識らず　世界は畢竟して依屬すべきに非ざることを悟り　いかゞせん煩惱と苦毒とは是衆生の顚倒より起ると　所謂實有に非ざる身を實有と謂ひ　幸福快樂を受には謂ひ　主我を計し常住と謂ひ　依屬に耐兼ざる世界に依屬し　自己の顚倒いかゞせん　脱せんと欲するも惑除き難し　覺せんと欲するも顚倒さめがたし。顚倒以て自己の心とし衆物象もて身とし有爲の世界に依屬したる身の果報つたなし　之を轉依するに如かじ。轉依とはこの天然の身と心と世界とに　この主我超え天然を超て　絕對の阿彌の眞我の中に眞の面目を求む。所謂肉團心にあらず　天然の賴耶を超へ絕對なる眞神卽ち阿彌の中なる自己なることを發見し　絕對無限の自己なることを意識し　楞嚴に所謂肉團心を脱し　賴耶を越て超然として　獨朗天眞阿彌の心體現前自己同一の心體現前する時　卽ち之十方微塵刹土も無限の中に投じ　無限の恩寵こゝに顯はれ入我々入　肉團身の自己阿彌の無限の眞我の中に投じ　此時に從前の自己は主我命脱し　東坡所謂　已に一念より生じまた一念より滅す　生滅の主我滅盡時　卽ち我佛の大圓覺と同じ　水を大海に投ずるが如く　風中に棄を鼓するが如く　盡空界に自己を求むるに自己なし　身心脱落して洞然蕩々已に絕對の中に亡して長く三界の苦輪を離れ　忽ち大我の中に活眼を開く十方を觀見すれば　曾て依屬し來りし世界一切微塵の刹土は　還て是眞我の中の塵なるを覺ゆ。

已に阿彌の中たる自己たること意識して　主我亡したるも　夫れのみにしては未だ阿彌の中に活動するに非ざれば　更生したる聖子にあらず。

歸命融合安立

歸命是よりは重ねて　歸命融合安立の相を明さんに　衆生は天然の主我には煩惱深くして底なく　生死の海は邊なく　苦を渡るに船未だ立せず　云何ぞ樂んで睡眠せん勇猛に勤め精進し心を攝して常に禪に在る。云何せん仰て天を仰ぐも地を俯すも怖るに足るものなく　阿彌に安置せる精神平和の靈福　歡喜といはんか安寧といはんかしばらく喩を以て其の狀をのべば　卽ち機能致一の狀態なり。譬ば天の如し仰げば彌〻高きが故に　猶し春日の如し暖和にして能く化育する故に　秋月の如し　清潔にて煩惱の熱を除くが故に　猶し大海の如し廣蕩として無邊の故に　山王の如し　八風の爲に動搖せざるが故に　雪山の如し情操皎潔の故に　活氣の如し新鮮なる活氣與へらるゝが故に　猶大地の如く愛憎なく　公平の故に　帝王の如し神聖の命令性の故に判官の如し情操を判じて正義ならしむる故に　淨水の如し弊垢を洗除するが故に火王

の如し　一切の垢質を燒滅する故に　蓮華の如し世間の汚泥に染みざるが故に　大乘の如し一切を重擔として生死を出るが故に　虛空の如し　世界に依屬せざるが故に猶し雷霆の如し末覺を覺するが故に　梵天王の如し善法に最上の故に　師子王の如し畏るゝ所なきが故に　象王の如し善く調伏するが故に　大地の如し一切の功德生ずるが故に　大宮殿の如し安住するが故に　城廓の如し六賊に害せられざるが故に。

昭和九年十月二十八日　印刷
昭和九年十月三十日　發行
（誌代年壹　圓）
編輯兼發行人　山崎辨成
小石川區關口町六十五番地
印刷人　小林七太郎
小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所
電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番